

令和 5 年 6 月 15 日現在

機関番号：32616  
研究種目：基盤研究(C) (一般)  
研究期間：2019～2022  
課題番号：19K00112  
研究課題名(和文)メランヒトンのカテキズムに関する研究

研究課題名(英文)Melanchthon's catechisms

研究代表者

菱刈 晃夫(Hishikai, Teruo)

国士舘大学・文学部・教授

研究者番号：50338290

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,800,000円

研究成果の概要(和文)：規律と愛、罰と赦しは、大きく「人類の教育」にとって永遠のテーマである。メランヒトンのカテキズムの分析を通じて、宗教および道徳の教育にとって重要な契機となる、律法(法)と福音(愛)、換言すれば規律と愛、罰と赦しの役割を明らかにした。

宗教改革期ドイツの時代的・社会的状況を十分に踏まえながら、とくにアグリコラとの比較によって、律法と福音がもつ意味や意義を、キリスト教思想史の中で浮き彫りにした。さらに『ザクセン領内教会巡察指導書』を中心とする資料、メランヒトンの個々のカテキズム、およびヴァリエーション等の分析を通して、その神学と倫理学との結節点にある教育の動態を明確化した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

これまで日本では本格的に詳しく取り上げられてこなかったメランヒトンのカテキズムの分析を通じて、宗教および道徳の教育にとって重要な契機となる、律法(法)と福音(愛)、換言すれば規律と愛、罰と赦しの役割を、はじめて明らかにした。

教育によって人間の本質を変えることはできないが、外的な振る舞いやモラルは形成し得る。教育は人間による意図的な行為であり、そこで律法は有効である。しかし人間の本性たる「罪人」の救済には、福音が必要である。教育に「できないこと」と「できること」の境界に導くのがカテキズムであった。これは今日の社会でも、教育に明確な限界を設定し、その責任や主体についての人間学的再考を促す。

研究成果の概要(英文)：The themes of law and love, punishment and forgiveness, are perennial subjects in the education of humanity. Through an analysis of Melanchthon's catechism, the roles of law and gospel, or discipline and love, punishment and forgiveness, were elucidated as crucial moments in religious and moral education.

Taking into account the historical and social context of Germany during the Reformation period, and particularly through comparison with Agricola, the meanings and significance of law and gospel were brought to light in the history of Christian thought. Furthermore, by analyzing documents such as the "Instruction by the Visitors," Melanchthon's individual catechisms, and variations, the dynamics of education at the nexus of theology and ethics were clarified.

研究分野：思想史

キーワード：悔い改め 律法 アグリコラ(ヨハン) 律法の教育的用法 カテキズム 福音 巡察指導書 良心の覚醒

## 1. 研究開始当初の背景

メランヒトンのカテキズムの成立過程・内容・構造に関する研究は、国内においてほとんどなく、またメランヒトンの思想構造全体に関する見取り図も国外でもようやく明確になりつつあるなかで、その教育思想も基礎的な描写に止まっていた。そこで、これまでの研究成果を着実に踏まえ、メランヒトンのカテキズムの原典を揃え、それに関連する書籍も部分的に収集しつつ、ようやく研究に本格的に取り掛かる準備が整いかけていた。宗教改革期ドイツにおける宗教そして道徳教育上もっとも重要なトピックである律法と福音、規律と愛、罰と赦しの意味内容を、キリスト教思想史の流れの中で解明するのに、メランヒトンのカテキズムは絶好の実例にもなると考え、これを中心的に取り上げた。

## 2. 研究の目的

16世紀「ドイツの教師」(Praeceptor Germaniae)と尊称されたメランヒトンによる宗教教育のための著述「カテキズム(教理問答書)」を取り上げ、この中に見られる思想の生成過程・内容・構造を時系列に従って分析することを通じて、宗教改革期における宗教と道徳教育のための重要契機である律法と福音(規律と愛・罰と赦し)の役割を、キリスト教思想史の中で浮き彫りにすることにある。具体的には、各カテキズムが執筆されるに至った当時の歴史的・社会的背景を明らかにし、とくにその際、メランヒトンと対立することになるアグリコラのカテキズムとの神学的観点の相違を明らかにする。

## 3. 研究の方法

律法と福音すなわち規律と愛、そして罰と赦しの捉え方をめぐってメランヒトンとヨハン・アグリコラとは神学思想上鋭く対立した。そのアグリコラとも比較しつつメランヒトンのカテキズムを、およそ三期に分けて、時系列に従って詳細に考察し、かつカテキズムの土台となるメランヒトンの思想構造と人間学を明らかにする。まず1527年前後「巡察」が開始されるまで、次にアグリコラとの対決、そして1543年『子どものカテキズム』と同時代のヴァリエーションについて、当時の歴史的・社会的背景を視野に入れて、分析・考察を行った。

## 4. 研究成果

第一に、アグリコラとの対立をめぐりながら、律法と福音、悔い改めと赦し、そして人間の再生や教育に関する認識の違いと課題が明らかになった。初期ルターの福音神学に深く共鳴したアグリコラとの相違は大きい。メランヒトンにおいて律法には三つの用法があったが、アグリコラにおいては第一の政治的市民的用法としてのみ価値を有するとされる。「悔い改め」は福音とキリストを想起すれば足りるのであり、ここに聖霊も来るとの見解である。それに対してメランヒトンは、そうしたキリスト者の生成のプロセスにおいて、段階的かつ継続的に「法」の果たす役割や用法を教育的に捉えていて、「悔い改め」がいきなり福音やキリストや「罪の赦し」から始まるとは想定していない。そもそも「罪の認識」のないところに、どうして罪の赦しや福音やキリストが来ることができるのか。キリスト教による宗教教育は、人間の心や魂の再内奥に働きかける人間の意図的作用であるが、ここでメランヒトンは第一に律法の使用が有効であることを繰り返し説き続けている。それは何もキリスト者に限らず、すべての人間と共通する道徳法をも包含するがゆえに、道徳教育とも自然な形でリンクしている。この点でメランヒトンは、あくまでも倫理学者であり、かつ神学者でもあったといえよう。そして、むしろ教育者でもあった。信仰の訓練(vbung, exercere)や成長(wachsen, crescere)という観点にこそ、メランヒトンのカテキズムの最大の特徴が見出される。しかるに必ずしもアグリコラと同様の「救い」の体験を経ない人々にとっては、安易な「罪の赦し」へと直結せざるをえない事態は容易に想定されよう。事実、そうした現状を顧みて巡察が行われ、『巡察指導書』がまとめられることになった。アグリコラにはメランヒトンのような教育的視点は見当たらない。キリストによる福音の再発見はルター神学においても重要なポイントではあるが、しかしそれはつねに律法と一体にして説かれなければならない。また子どもや庶民には訓練し成長するものとして教育的に働きかけなければならない。それほど人間は罪深いということである。この世に生きる限り、どこまでも肉として留まるのである。再生した者における律法の教育的用法についてメランヒトンが晩年に至っても語るのには、人間が死に至るまで信仰という点においては、罪人であり肉であるがゆえにこそ祈りを通じて成長するし、また成長しなければならない存在であるという、深い自覚と認識に立っているからだといえよう。この点がアグリコラには希薄である。教育者・メランヒトンと神学者・アグリコラとの隔たりの大きさと、その原因が明確となった。

第二に、メランヒトンが律法も含めた法の価値と自由意志を強調せざるをえない理由が明らかとなった。アグリコラはあくまでも神学者として律法がもつ規律としての役割を神学的には低次のものあるいは無用と捉え、福音がもつ愛の役割のほうを遙かに高次で強力なものと見なした。それは初期のルター神学との出会いがもたらした衝撃的なインパクトであった。悔い改めを生じさせるのは福音による愛であって決して律法ではないとの認識である。しかしメランヒトンはあくまでも倫理学者として、そして神学者さらに教師として律法の拡充された積極的な役割を見出した。その背景には、単に神学的な思想の裏づけがあるのみならず、のっぴきならない現実への具体的な対応を迫られるという社会的な要請があった。『コロサイの信徒への手紙注解』でもメランヒトンは「もし神の前で市民的な正しさだけで十分であると判断するなら、哲学は義認について誤りを犯す」と発言することを忘れてはいない。しかも「自身の自然本性から悪徳に対抗する力を理性は十分にもっている」と見なし、聖霊は必要ではないと見るとき、哲学は誤りを犯す。聖霊は、自然本性の虚弱から、あるいは悪魔から、私たちが大きな不品行へと導かれないようにするため、心を再生し、私たちを矯正するのである」と哲学や理性の限界、私たち人間の判断力の脆弱性と、それを「祈り」によってサポートする必要性を十分に認めている。それにもかかわらず「哲学あるいは理性による判断力は、神の意志について信頼に足るものを何も保証することはできないが、しかし自然の事物や市民道徳について正しく判断ができる」。これによって人間社会の道德化は可能となる。こうした資質あるいは能力が人間の自然本性には、たとえ墮罪後の破壊にさらされているとはいえ、自然法と共にまだ残っているとメランヒトンは考えていた。これは人間の教育や再生による成長を理論的にも擁護するうえでも、また人間の責任性や主体性さらには自由意志を確保するうえでも、極めて重要な見方だといえよう。この人間学的基礎に根ざした教育原理より社会の道德的改造が開始され、次に「心を清めること」(das hertz reinigen) という神のわざ(教育)が準備されることになるのだから。

第三に、メランヒトンの一連のカテキズム作品とその後のヴァリエーションからも、メランヒトンが人間の行為(わざ)の及ぶ範囲と、それを可能にする資質や能力の根拠が明らかとなった。とくに1548年のカテキズムでは、神の像としての人間を、理性と自由意志という二つの資質に求め、その能力を理性、感情、自由意志の三つに分けて説明するのに、多くの紙幅を割いている。ここにメランヒトンの教育思想が依拠する人間観、さらには人間学が、あらためて明確にされている。しかも心の純化と再生に必要な不可欠な良心の覚醒、すなわち「疚しい良心」の働きは、情動的・感情的な心の動きであることも明示されている。

総じて、ルターによる宗教改革の進展に伴い、またカテキズムによる教育も盛んとなるが、同じルターの教えに忠実であるとした人々の間でさえ、当時の嵐のような社会的激変の中で、その教説にもさまざまな変異が生じていた。アグリコラに端を発する反律法論争への対応からも、メランヒトンは現実的な社会の安定や、カトリック教会に代わる教育制度の土台を、ヒューマニズムによりながら再構築する必要に迫られていた。その具体的な成果として、数々のカテキズムが成立することになった。その本質的特徴とは、あくまでも信仰のみによるルター神学を基としながら、律法もしくは法による良心の覚醒と悔い改めを開始点として、人間の心の純化と再生を、そして社会の改善を実現しようとするところにある。これは、実のところ人間の手には負えない、神の教育の範疇にある。が、メランヒトンが究極的な関心を寄せて問題としているのは、こうした心の内奥の変容にある。と同時に、もともとメランヒトンは人文主義者である。法による良心の覚醒とはいっても、その法そのものは、自然法としての人間本性に生まれつき刻印されているはずのもの、とメランヒトンには捉えられていた。ゆえに、ここに教育への希望と可能性が開かれることになる。では、こうした自然法思想や、それを裏づける「自然の光」(lumen naturale)説を、メランヒトンはどのような受容し発展させていったのであろうか。そのプロセスに関する思想史的研究へと、展望は開かれる。

ルター神学が当時の社会に受容される過程での出来事は平穏ではなかった。とくにこれを主に教育制度に具体化していく過程で、メランヒトンが果たした役割とその真意の詳細が、今回の研究によって明らかとなった。これはメランヒトンの倫理学について体系的に解明するための、思想史的土台あるいは骨格を浮き上がらせた。あわせて関連するメランヒトンの原典著作からの邦訳、さらに敬虔主義に至ってはフランケや、さらにカントにまで、その射程を広げることもできた。キリスト教思想史研究において、メランヒトンに特化した研究は、とくに日本ではこれが最初のものである。メランヒトンのベーシックな原典著作の翻訳も含めて、今回論文などにして公にした複数の研究成果にさらに磨きをかけてまとめ、『メランヒトンの倫理思想 研究と翻訳』(仮題)として出版を予定している。これによって、わが国におけるキリスト教思想史研究の空白を埋めるべく、一連のメランヒトン思想研究がまたひとつ付加されることで、関連学界には

一定のインパクトを与えることが期待できよう。

最後に、これからも続けられるメランヒトン研究について、あらためて彼の主な活動領域をわかりやすく図式化すると、以下ようになる。

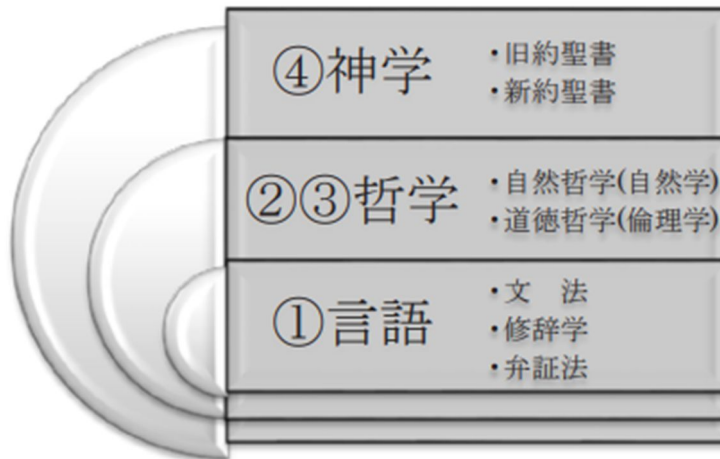


図1 人文学者・神学者メランヒトンの主な活動領域

さらにメランヒトン思想の全体構造を図式化すると、以下ようになる。これより律法と福音は全体を貫く基本テーマであり、その具体化がカテキズムであることがわかる。ここに本研究が位置づけられる。



図2 メランヒトン思想のコアを形成するもの

今後は、メランヒトンの言語に関するテキストを押さえつつ、その倫理学と自然学、すなわち哲学、そして神学へと、日本でのメランヒトン思想研究に一定の成果を残すべく探究と共に翻訳も継続してゆきたい。

#### 引用文献

菱刈晃夫『メランヒトンの人間学と教育思想 研究と翻訳』成文堂、2018年。

#### 参考文献

Frank, Günter (Hg.) : Philipp Melanchthon. Der Reformator zwischen Glauben und Wissen. Ein Handbuch. Berlin 2017.

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計12件（うち査読付論文 3件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 11件）

1. 著者名 菱刈晃夫	4. 巻 4
2. 論文標題 メランヒトン「カテキズム」の特徴と展開	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 国土館人文科学論集	6. 最初と最後の頁 1-17
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 菱刈晃夫	4. 巻 24
2. 論文標題 翻訳・研究：フランケ『聖書に従う人生の規則』（1689年）フランケ『キリスト者の完全の始まり』（1691年）「フランケにおける「心の養育」カテキズムを中心に」	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 初等教育論集	6. 最初と最後の頁 86-101
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 菱刈晃夫	4. 巻 3
2. 論文標題 メランヒトン『子どものカテキズム』の構造と特質	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 国土館人文科学論集	6. 最初と最後の頁 16-29
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 菱刈晃夫	4. 巻 3
2. 論文標題 翻訳：メランヒトン『道徳哲学概要』（その3）	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 国土館人文科学論集	6. 最初と最後の頁 45-66
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 菱刈晃夫	4. 巻 23
2. 論文標題 翻訳：メランヒトン『道徳哲学概要の献呈書簡』(1537年)	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 初等教育論集	6. 最初と最後の頁 119-124
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 菱刈晃夫	4. 巻 11
2. 論文標題 メランヒトン『巡察指導書』の内容と背景ー法の価値と自由意志を強調する理由ー	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 国土館人文学	6. 最初と最後の頁 99-121
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 菱刈晃夫	4. 巻 2
2. 論文標題 翻訳：メランヒトン『道徳哲学概要』(その2)	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 国土館人文科学論集	6. 最初と最後の頁 107-123
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 菱刈晃夫	4. 巻 8
2. 論文標題 翻訳：メランヒトン『法の価値について』(1538年)『法を学ぶ価値について』(1543年)	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 ルターと宗教改革(日本ルター学会研究年報)	6. 最初と最後の頁 94-112
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 菱刈晃夫	4. 巻 22
2. 論文標題 翻訳：メランヒトン『キケロー義務論への序言』	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 初等教育論集	6. 最初と最後の頁 96-101
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 菱刈晃夫	4. 巻 10
2. 論文標題 メランヒトンとアグリコラ カテキズムをめぐって	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 国土館人文学	6. 最初と最後の頁 21-45
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 菱刈晃夫	4. 巻 1
2. 論文標題 翻訳：メランヒトン『道徳哲学概要』（その1）	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 国土館人文科学論集	6. 最初と最後の頁 80-97
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 菱刈晃夫	4. 巻 21
2. 論文標題 翻訳：メランヒトン『コロサイの信徒への手紙注解』（1527年）より2章8節部分	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 初等教育論集	6. 最初と最後の頁 89-101
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -



〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 菱刈晃夫
2. 発表標題 メラニトンにおけるideae innataeについて
3. 学会等名 日本ルター学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 菱刈晃夫
2. 発表標題 メラニトンとアグリコラ カテキズムをめぐる対立
3. 学会等名 日本ルター学会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 ベルンハルト・グレットウイゼン、金子晴勇、菱刈晃夫	4. 発行年 2021年
2. 出版社 知泉書館	5. 総ページ数 424
3. 書名 哲学的人間学	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------